『茶会集』の評釈（四）
― 第四代将軍徳川家綱の茶の湯と尾張家縁の人々の茶の湯 ―

An Annotation of "Chakaishu" (IV): Chanoyu Hosted by Shogun Ietsuna and by People who are involved with the Owari Tokugawa family.

石井　智恵美*

Chiemi ISHII

抄録　名古屋市蓬左文庫所蔵の『茶会集』を前報告に引き続き評釈する。今回は徳川四代将軍家綱が延宝二年と五年に江戸城中において催した四回の茶会と元禄十三年正月十七日に幕府御用根付挽物師と推測されている池嶋立佐が開いた茶会について検討する。これは、前報告の「『茶会集』の評釈（一）―寛永年間の御成の茶会―」で示した表1「『茶会集』に記録される茶会」の10から14までが対象である。また、回数には数えられていないが、13回目の茶会の後に元禄十年八月十二日夕方の西福寺で尾張家国家老・織田貞幹が所望したと推測される茶会も記録されている。

キーワード　茶会集・徳川家綱・茶の湯・池嶋立佐・織田貞幹

はじめに

『茶会集』は名古屋市蓬左文庫に所蔵される茶会記である。[1~3]前報告でも述べたが、その内容の多くは大名家に係わりのある茶会の記録であり、尾張徳川家の茶会の記録に限定されているわけではない。今回は[1]前報告に掲載した表1「『茶会集』に記録される茶会」の中から茶会10～14について評釈する。また、茶会13と14の間に項目を立てずに記録されている茶会についても評釈する。

茶会10のあった延宝二年と茶会11～13のあった延宝五年は四代将軍徳川家綱（一六四一～八〇）の御代である。[3]前報告では家綱が江戸城内において開いた六回の将軍手前の茶会について評釈した。今回は更に別の四回の将軍家綱手前の茶会を評釈する。将軍家綱は生涯に三十一回の茶の湯に係る記録があり、そのうちの二十二回は家綱手前の茶であることは[4]前報告において既に述べた。同様のことは[5]武田庸二郎氏によっても確認されている。これらの記録は『厳有院殿御実紀』によるものであるが、これは公的記録であり、茶の湯があったかどうかは記録されていても詳細な茶の湯の道具立て等は記録されていない。『茶会集』の中に家綱手前の茶二十二回の内の十回の詳細が示されていることは尾張家が将軍家の茶の湯に関心を置いていたことが

* いしい　ちえみ　文教大学教育学部学校教育課程家庭専修

分かるとともに家綱の茶の湯を研究する上でも貴重な史料である。

茶会13と14の間に項目を立てずに記録されている茶会は尾張家国家老であった織田貞幹（さだもと）に係る茶会と推測した。[6]織田貞幹は織田信長の曾孫にあたる。叔父の貞置の養嫡子となり、尾張大納言光友卿に仕え、尾張家の国家老となった。織田有楽の流れをくむ茶の湯を学び、後に自ら茶の湯の流派（貞置流）を打ち立てた叔父・織田貞置に茶の湯を学んだとされる。

更に、幕府御用根付挽物師と推測されている池嶋立佐の茶会について評釈する。池嶋立佐に関する信頼できる資料はほとんど見当たらないが、この茶会の記録は詳細であり、幕府御用とはいえ一職人の茶会とみるには豪華な道具立てであり会席である。

凡例

一、本書は名古屋市蓬左文庫の架蔵にかかるものである。

一、翻刻にあたっては、原本の体裁を残すことを原則としたが、現在不使用の古体字・異体字は■で表し、その下に〔　〕括弧で現在の文字を入れた。

一、『厳有院殿御実紀』は『新訂増補　国史大系42　徳川実紀第五編』吉川弘文館を用いた。

一、『角川茶道大辞典』は本文中では『角川茶道』と略した。

一、『新版茶道大辞典』は本文中では『新版茶道』と略した。

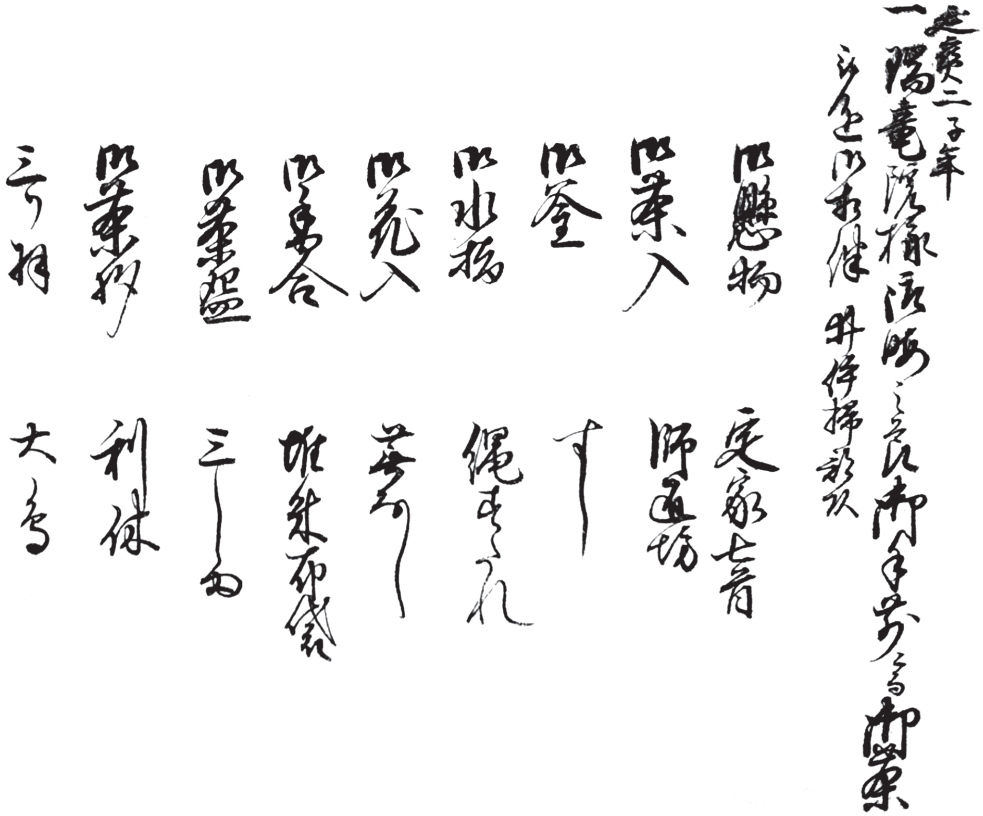
一、『日本国語大辞典』第二版は本文中では『日国Ⅱ』と略した。

一、本書の翻刻・掲載の御許可を賜った名古屋市蓬左文庫に厚く深謝いたします。

表紙　乾

表紙　坤

〔茶会10　影印〕



〔茶会10　原文〕

延宝二子年[1]

一　瑞竜院様[2]御晦之節御手前ニ而御茶

被進御相伴　井伊掃部頭[3]

御懸物　定家七首

御茶入　師匠坊

御釜　すし

御水指　縄すたれ

御花入　燕なし[4]

御香合　堆朱布袋

御茶盌　三しま

御茶杓　利休

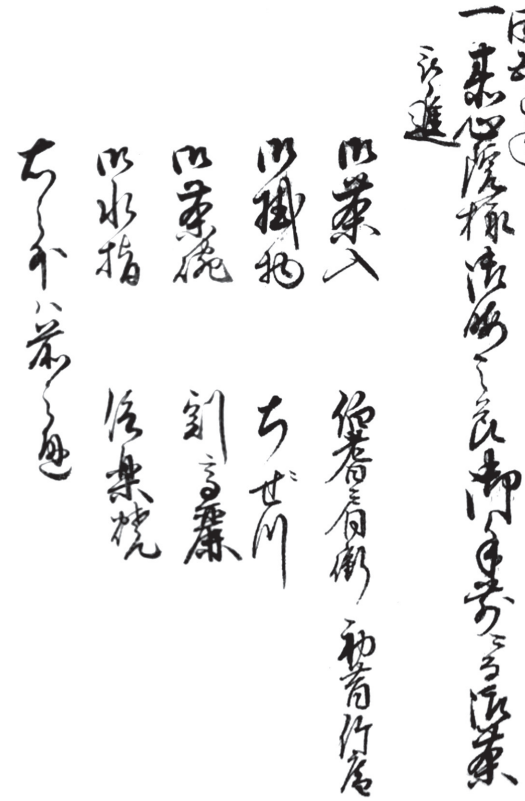
三ツ羽　大鳥

〔現代語訳〕

延宝二年（一六七四）寅（原文では子）（三月廿二日）

一　瑞竜院（尾張二代藩主光友卿）が辭見の挨拶の折、（将軍の）手前で御茶を頂いた。御相伴は井伊掃部頭であった。掛物は定家七首、茶入は師匠坊の肩衝、釜は筋、水指は縄簾、花入は燕なし、香合は堆朱の布袋、茶椀は三島、茶杓は利休作、三ツ羽（羽箒）は大鳥である。

〔茶会11　影印〕



〔茶会11　原文〕

同五巳(1)年

泰心院(2)様御晦之節御手前ニ而御茶被進

御茶入　伯耆肩衝(3)　初音竹庵(4)

御掛物　ちぜつ(5)

御茶椀　割高麗(6)

御水指　信楽焼

右之外ハ前之通

〔現代語訳〕

延宝五巳年（一六七七）三月二十八日

泰心院（尾張三代藩主綱誠卿）が辭見の挨拶の折、将軍家綱の手前にてお茶を頂いた。

茶入は初音竹庵献上の伯耆肩衝。掛物は痴絶道冲の墨蹟。茶椀は割高麗（臺）。水指は信楽焼。右のほかは前のもの（茶会10）と同じである。

〔茶会12　影印〕

〔茶会12　原文〕

同年[1]

一　水戸様御晦之節御手前ニ而御茶被進

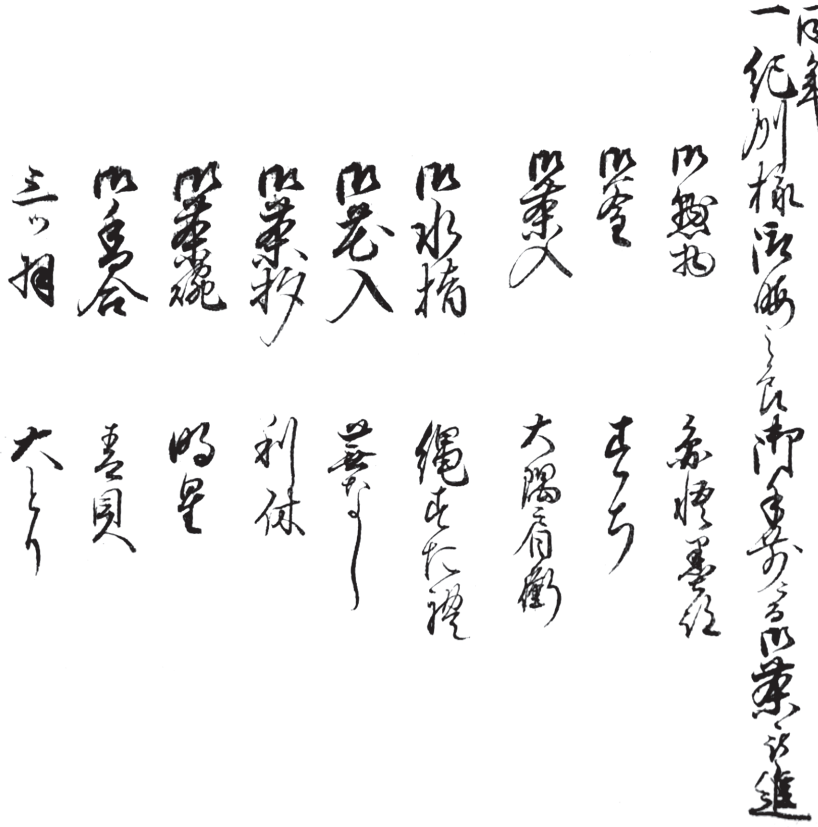
御掛物　虚堂
御釜　妙門霰
御茶入　伯耆肩衝
御水指　縄すた礼
御華入　青磁碗
御茶杓　利休
御茶椀　はけめ[2]
御香合　青貝布袋
三ツ羽　大鳥

〔現代語訳〕

延宝五年四月十一日

一　水戸宰相光國が辞見の挨拶の折、将軍家綱の手前にてお茶を頂いた。掛物は虚堂の墨蹟、釜は妙門霰、茶入は伯耆肩衝、水指は縄簾、花入は青磁の碗、茶杓は利休作、香合は青貝の布袋、羽箒は大鳥の三つ羽である。

〔茶会13　影印〕



〔茶会13　原文〕

同年[1]

一　紀州様[2]御晦之節御手前[三]而御茶被進

御懸物　圓悟墨蹟

御釜　すち

御茶入　大隈肩衝

御水指　縄すた禮

御花入　蕪なし[3]

御茶杓　利休

御茶椀　明星[4]

御香合　青貝

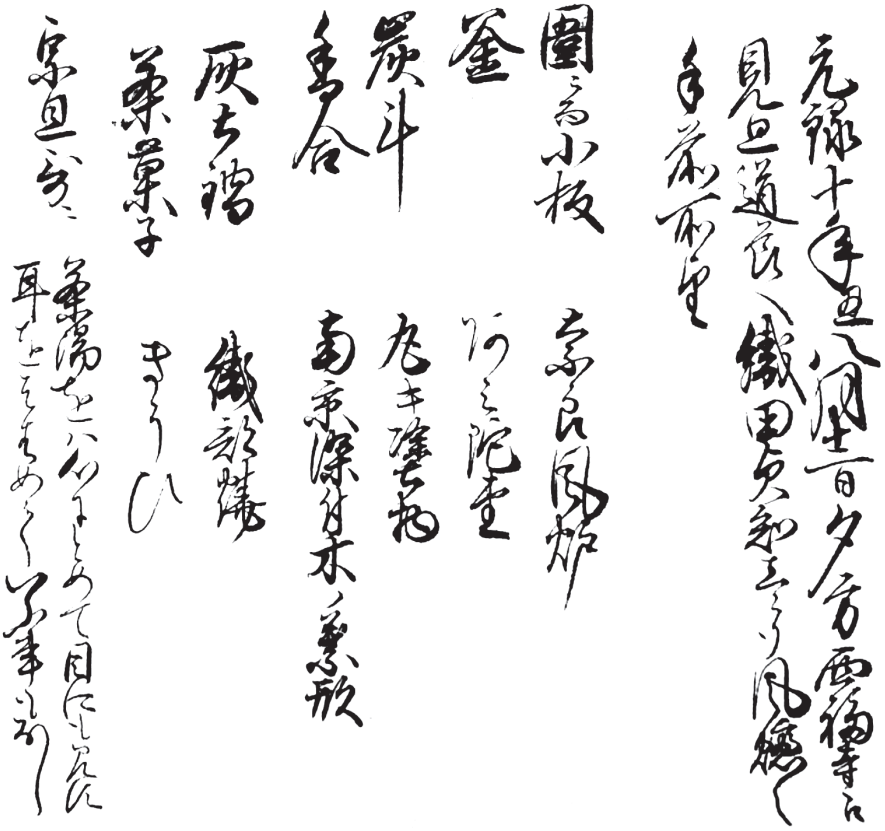
三ツ羽　大とり

〔現代語訳〕

延宝五年三月二十六日

一　紀州二代藩主光貞が辭見の挨拶の折、将軍の手前にてお茶を頂いた。掛物は圓悟の墨蹟、釜は筋、茶入は大隈肩衝、水指は縄簾、花入は蕪なし、茶杓は利休作、茶碗は明星、香合は青貝、羽箒は大鳥の三ツ羽である。

〔茶会　番号なし　影印〕



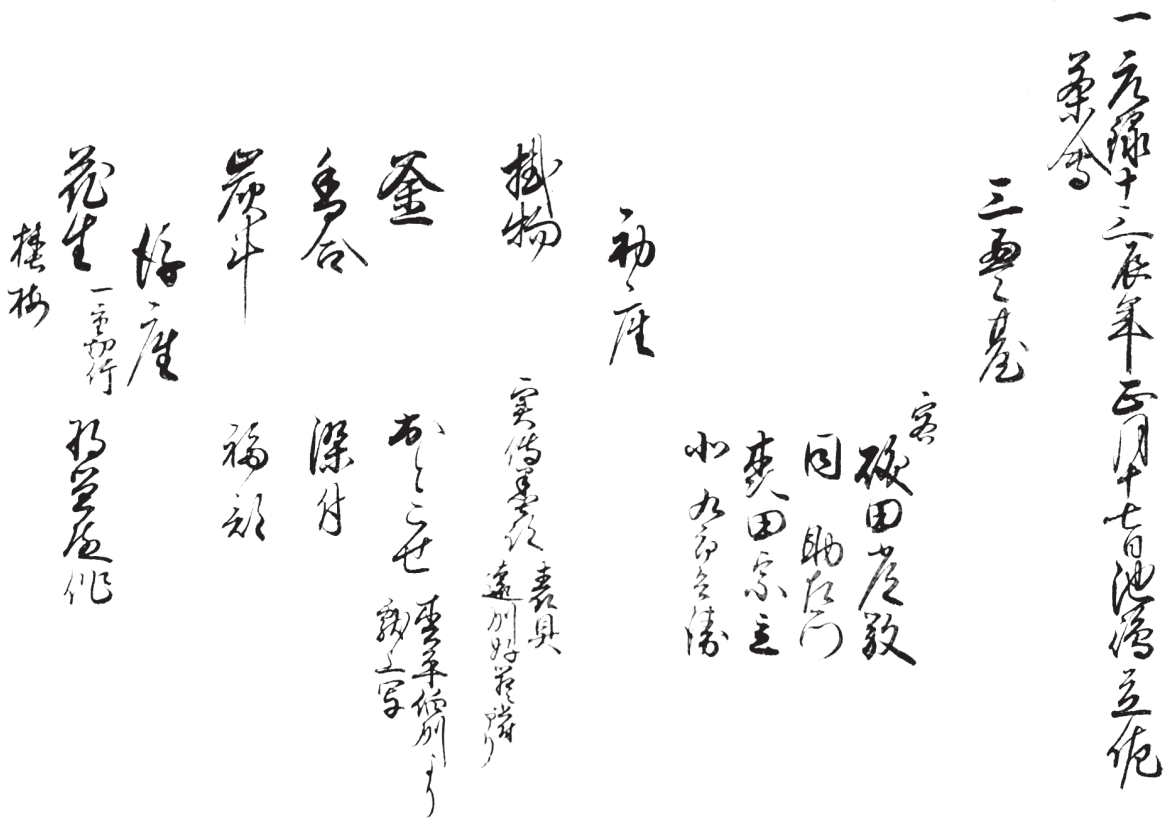
〔茶会　番号なし　原文〕

元禄十年丑(1)八月十二日夕方西福寺江
見廻道節へ織田貞知(2)壱夕風爐之
点前所望
圍ニ而小板　奈良風炉(3)
釜　阿ミ陀堂(4)
炭斗　丸キ塗物
香合　南京染付(5)木ノ葉形
灰土鍋　織部焼(6)
茶菓子　きうひ(7)
宗旦哥(8)ニ　茶湯をハ心にとめて目にも見す
耳をそはめていふ事もなし

〔現代語訳〕

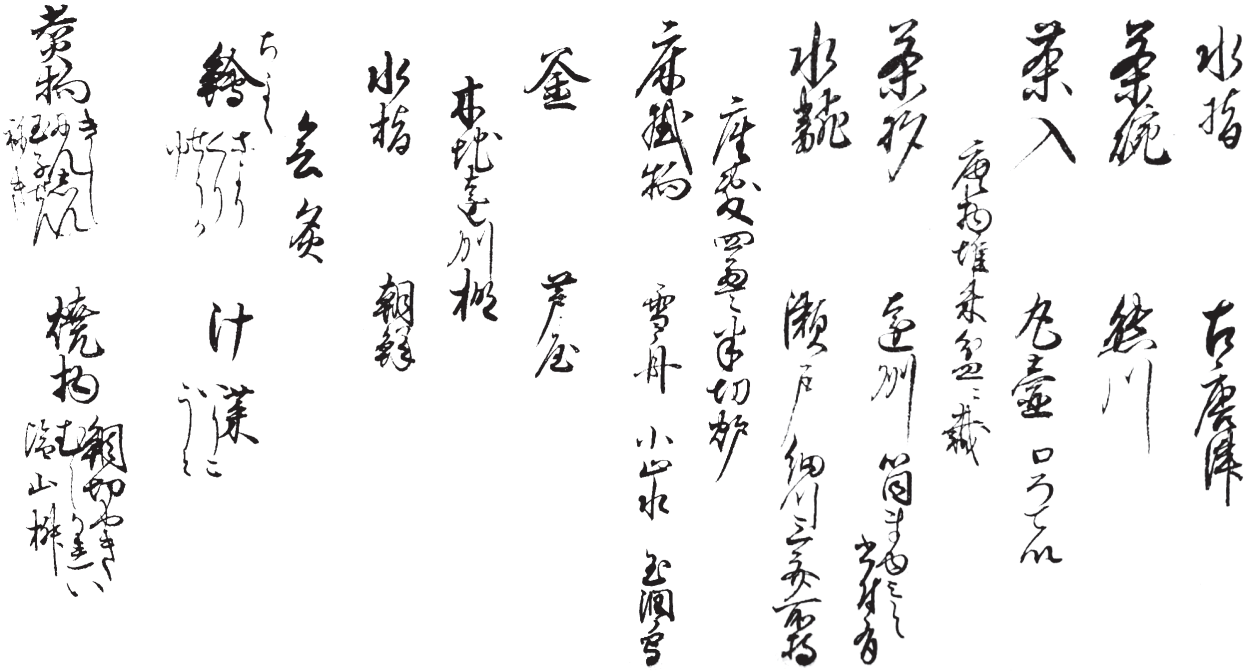
元禄十年（一六九七）丑八月十二日夕方、西福寺へ、道節を見舞う。織田貞知（貞幹のこと）が一夜の風炉の手前を所望した。囲いにて小板を敷いて奈良風炉を据えて。釜は阿弥陀堂で、炭斗は丸い塗り物。香合は南京の染付の模様のある木の葉形をしている。灰土鍋は織部焼で、茶菓子は求肥である。宗旦の歌に「茶湯をば心にとめて目にも見ず耳をそばめていうこともなし」とある。

〔茶会14　影印〕



〔茶会14　原文〕

一　元禄十三辰年正月十七日池嶋立佐(1)
茶会
三畳臺(2)
客
磯田常数
同　助左エ門(3)
松田宗立
北　九郎兵衛
初座(4)
掛物　実傳墨蹟　表具
遠州好箱ニ書付アリ
釜　おとこせ(6)　松平伯州(7)より
献上写
香合　染付
炭斗　福部
後座(8)
花生　一重切竹　掃部殿作(9)
楼梅(10)
水指　古唐津(11)
茶碗　熊川(12)
茶入　丸壺　口ろてい(13)
唐物堆朱盆ニ載
茶杓　遠州　筒ま由者こ(14)
書付有
水飜　瀬戸　細川三斎所持(15)
座敷四畳半切炉
床掛物　雪舟　小山水　玉澗ノ写(16)

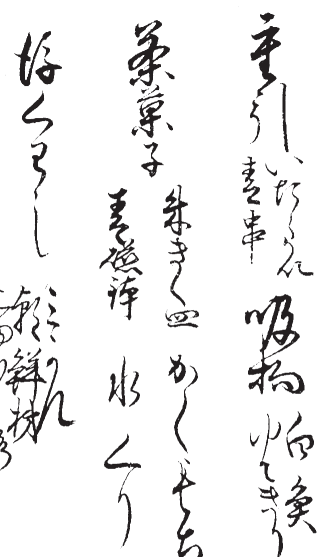


釜　芦屋[17]
木地遠州極[18]
水指　朝鮮
会炙
ちよく
さより
鱠　くり
せうか
ゆ
汁　菜
いりこ
うと
きし
煮物　にん志ん
玉子せん
祢き
焼物　鯛切やき
むしかれい
塩山椒
重引　いたい[19]
青串
吸物　白魚
ゆてきり
茶菓子　朱きく皿　かくもち
青磁鉢　水くり
後くわし　ミかん
軟鮮柿
こまほうろ[20]

〔現代語訳〕

一　元禄十三年（一七〇〇）辰正月十七日に池嶋立佐の茶会があった。茶室は三畳台目で相伴客は磯田常数、磯田助左エ門、松田宗立、北九郎兵衛であった。初座の飾り。掛物は実傳の墨蹟で表具は遠州の好みと箱に書付がある。釜は乙御前（おとごぜ）で松平伯州より献上されたものの写しである。香合は染付で、炭斗は瓢である。

後座の飾り。花生は一重切の竹筒で掃部殿の作である。花は楼梅が活けてあった。水指は古唐津。茶碗は熊川。茶入は丸壺で口は驢蹄型であり、唐物の堆朱の盆に載っていた。茶杓は遠州の筒型の繭箱で、



書付がある。水こぼしは瀬戸焼で細川三斎が所持していたもの。

四畳半で切炉のある座敷の飾り。床の掛物は雪舟の小山水画で玉澗の写しである。釜は芦屋釜で生地には遠州の極がある。水指は朝鮮のものである。

会席（炙）。猪口は膾で、さより、栗、生姜、柚子。汁は菜、いりこ、うど。煮物は雉、人参、薄焼き卵の千切り、葱。焼き物は鯛の切焼き、蒸鰈、塩山椒。

重引は板鯛、青串に刺してある。吸物は白魚の茹で切り。茶菓子は朱色の菊皿に角餅。青磁の鉢に水栗。後菓子は蜜柑、軟鮮柿（熟柿のことか）、ごまぼうろであった。

（註）

〔茶会10〕

（1）延宝二年（一六七四）の茶会には日付の記載がないが、『厳有院殿御実紀』の延宝二年の記録の中で、瑞竜院様、即ち尾張中納言光友卿の辞見の記述は三月廿二日のみである。それによると、

尾張中納言光友卿辞見せらる。井伊掃部頭直澄と共に御茶室に召て。御手前の御茶をたまはり。後宴ありて御盃まいる。御餞とて鷹馬をつかはさる。

とあり、ここに茶の湯の道具類の記載はない。そこで『江戸幕府日記』（国立公文書館蔵）の延宝二年三月廿二日条をみると、道具類は

御掛物　定家七首　　御茶入　師匠坊
御花入　青磁蕪　　お茶椀　三島はけ目
御茶杓　利休之作　　御水さし　縄すたれ

と記載されているので、この茶会は延宝二年三月廿二日の日付と考えてよい。また、延宝二年子年と記述されているが、延宝二年は寅年である。

（2）瑞竜院様　尾張藩二代藩主　尾張大納言光友卿（延宝二年の時点では中納言。元禄三年五月〔一六九〇〕に従二位権大納言に叙せられた）一六二五―一七〇〇

寛永二年（一六二五）七月二十九日、尾張藩初代藩主徳川義直（よしなお）の長男として名古屋城に生まれた。生母は側室吉田氏お尉の方。寛永十六年（一六三九）九月、家光の娘千代姫を正室に迎えた。慶安三年（一六五〇）、尾張名古屋藩二代藩主となる。名古屋城二の丸に

馬場を設置するなど武技にもすぐれ、また和歌、書画、能楽、茶道もよくした。特に絵画は狩野探幽に師事した。藩主在任四十三年の後に致仕し、元禄十三年（一七〇〇）十月十六日死去。七十六歳。初名は光義。

（3）井伊掃部頭　井伊掃部頭直澄であることが『厳有院殿御実紀』に記載されている。『江戸時代全大名家事典』（東京堂出版）によれば

（彦根藩）三代直澄は寛永二年（一六二五）七月十五日、（二代）直孝の四男として彦根に生まれた。生母は側室石居氏。（中略）万治二年四月、にわかに直孝の養嗣子となり、同年七月に家督を相続し、従四位下侍従に昇叙された。寛文五年（一六六五）に左近衛権少将、のち掃部頭に任ぜられ、同八年十一月に大老に就任した。（中略）大老在任中の延宝四年（一六七六）一月三日、五二歳で没した

と記載されており、この時、直澄は大老として尾張光友卿の相客となっている。

（4）蕪なし　無鏑とも書く。「無鏑」は既に「『茶会集の評釈』（一）―寛永年間の御成の茶会―」で解説したが、『江戸幕府日記』のこの日の記録では「青磁蕪」と記述されている。徳川将軍家に伝わった蕪なしは青磁といわれている。『江戸幕府日記』の中の「青磁蕪」は「青磁蕪なし」とすべき誤りと考えられる。

〔茶会11〕

（1）同五巳年とのみ記録されているが、延宝五年とすると徳川綱誠（尾張徳川家三代藩主）はまだ藩主になっていない。綱誠が藩主になるのは二十二年も後のことである。『厳有院殿御実紀』の延宝五年の徳川綱誠の辞見の記録は三月二十八日の一件しかない。それによると、

中将綱誠卿辞見あり。御茶室にて御茶賜ひ。御宴ありて鷹馬をつかはさる。

ここには茶会の詳細は記録されていない。しかし、『江戸幕府日記』の延宝五年三月二十八日条の記述には尾張中将殿の辞見のあいさつの折の茶会の記録がある。それによると、

上使昨日尾張中将殿尾州江御暇依之已后刻登　城御料理膳之席西湖間酒井雅樂頭稲葉若狭守久世大和守土屋但馬守祗候令挨拶

松平主計頭
小堀下総守
本條因幡守
給仕中奥お小姓

右御饗應過而御座敷通令案内於御囲御手前ニ而御茶被下之御頭雅樂頭伺公

御囲御茶具御飾

御掛物　御茶入　四聖坊
御花入　青磁蕪なし　御茶椀　わり高臺
御茶杓　利休　御水指　信楽
御釜　筋　御香合　堆朱布袋
三羽　大鳥

と記録されており、将軍御手前の茶であることも確認できる。茶会11では御掛物が「ちぜつ」とされているが、『江戸幕府日記』では

明確にされていない。また、茶会11ではお茶入れが「伯耆肩衝」とされているが、『江戸幕府日記』では「四聖坊」とされている。

（2）泰心院様　尾張三代藩主徳川綱誠のこと。とくがわ　つななり（つなのぶ）、一六五二―一六九九　尾張中将綱誠は延宝5年には25歳。『国史大辞典』によれば

慶安五年八月二日生まれ。徳川光友の長男。元禄六年尾張名古屋藩主徳川家三代となる。元禄十二年六月五日死去。四十八歳。初名は綱義。

とある。また、『江戸時代全大名家事典』によれば、

生母は三代将軍家光の娘千代姫。（中略）父光友の隠居にともなって、四十二歳で家督を相続し、権中納言に叙せられた。先代の藩政を踏襲したが、将軍綱吉の江戸藩邸来訪などにより、藩財政はますます悪化し、自らも倹約に努めた。一方、父と同じく武芸を好み、また学問にも関心が深く、吉見幸和・天野信景らに編纂を命じて『尾張風土記』に着手し、以後、尾張の地誌研究が盛んになる契機をつくった。在任六年後の元禄十二年六月五日、四十八歳で没した。誠公と諡された。

と説明されている。

（3）伯耆肩衝　ほうきかたつき　小田栄一氏（『角川茶道』）はこれを「大名物。漢作唐物茶入。中村伯耆守忠一が所持したことでその名がある。伝来は慶長十四年（一六〇九）同家断絶後幕府の有に帰し、鳥居右京に賜った。同家も安永十三年（一六三六）断絶し、同十九年松平信綱が拝領、その子輝之がまた幕府へ献上した。その後延宝八年（一六八〇）家綱遺物として水戸侯がこれを拝領したが、元禄十三年（一七〇〇）同家からまた幕府に献上、以後代々柳営に伝えられた。形姿は甑は下張り、捻り返しは浅い。肩はやや撫で、胴・腰・裾への曲線は漢作らしい風格を見せている。釉景は新田に似た藍鼠気を含んだ地釉に飴色釉のなだれが置形を作っている。裾以下鉄気色の土現れ、畳付は板起こしである。『徳川家所蔵御道具書画目録』『麟鳳亀竜』『東山御物御内別帳』『玩貨名物記』『古今名物類聚』『大正名器鑑』ほか諸茶会記に所載されている」と説明している。

松平信綱（武蔵川越藩初代藩主）の嫡男で伯耆肩衝を父の遺物として将軍家に献上したのは、輝之ではなく川越藩二代藩主・松平輝綱である。

（4）初音竹庵　（不詳）『茶会集』の記述の仕方から推測すると、伯耆肩衝が初音竹庵より献上されたと読めるが確認できない。

（5）ちぜつ　痴絶道冲　一一六九～一二五〇　白川宗昭氏（『角川茶道』）によれば、

南宋代後期の臨済宗虎丘派の名僧。長江（江蘇省）の人。曹源道生に参じてその法を嗣ぐ。嘉定十二年（一二一九）十刹天寧寺に出世したのち、景徳寺・広利寺・霊隠寺・万寿寺と五山のうち四寺を歴住し大いに宗風を挙揚した。その墨蹟は早くから珍重され、『天王寺屋会記』『松屋会記』などにしばしば掛物として登場し、『松屋名物集』『墨蹟之写』などにも数多く散見する。遺墨は七点ほど伝来するが、東京国立博物館蔵の「大慧墨蹟跋語」（重文）、高野光正氏蔵の「警策」（重文）が有名。また浅田長平氏蔵の「無準着忌上堂法語」（重文）はもと片桐石州が所持し、のちに松平不昧が愛蔵したもの。峻厳な禅機を漂わせる書である。淳祐十年五月十三日示寂。

と説明している。

（6）割高麗「高麗茶碗　割高台」のことと推測する。『江戸幕府日記』には「わり高臺」と記録されている。

〔茶会12〕

（1）同年とのみ記されているが、延宝五年のことと推測する。延宝五年の水戸宰相光圀の辞見の記録は『厳有院殿御実紀』によれば四月十一日の一件しかない。それによると、

宰相光圀卿辭見せらる。御茶たまはりてのち御宴開かれ。鷹馬をつかはされ。

と記述されているが、やはり茶の湯の詳細についての記録はない。しかし、『江戸幕府日記』の四月十一日条によれば、

水戸宰相殿江昨日以　上使被遣御暇依之辰刻登　城御料理膳之席
西湖間雅樂頭美濃守大和守但馬守伺公
松平主計頭
小堀下総守
本条因幡守
給仕
右御料理過而於御囲　御手前ニ而被下御茶御座敷迠但馬守案内之
宰相殿御囲江被相越御次ニ雅樂頭伺公
御囲御茶具御飾
御掛物　虚堂墨蹟　御茶入　伯耆肩衝
御茶椀　明星　御花入　青磁碗
御茶杓　利休　御釜　妙門霰
御水指　縄簾　御香合　青貝布袋
三羽　大鳥

と記録されているので、この日と確認できる。また、茶会11、12、13の給仕の顔触れはほぼ同じであり、このことからも茶会は延宝5年の記録と考えてよい。

（2）御茶碗　はけめ「はけめ」については既に[1]前報告（『茶会集の評釈（一）―寛永年間の御成の茶会―）にて解説したが、『江戸幕府日記』では「御茶碗　明星」と記録されている。

〔茶会13〕

（1）同年とのみ記されているが延宝五年のことと推測する。延宝五年の紀州様の辞見の記録は『厳有院殿御実紀』によれば三月二六日の一件のみである。それによると、

中納言光貞卿辭見せらる。御茶室にて御手前の御茶たまひ。又御宴開かれ鷹馬を賜ふ。

と記述されており、御手前の御茶であることも記されているが、茶の湯の詳細は記録されていない。しかし、『江戸幕府日記』の三月二十六日条によれば、

昨日以　上使紀伊黄門國許江被御暇因茲巳刻登　城御料理膳之席
西湖間雅樂頭美濃守大和守但馬守伺公
松平主計頭
小堀下総守
本條因幡守
給仕
右御料理過而於御囲　御手前ニ而被下御茶御座敷迠美濃守案内
黄門御囲江被相越御頭ニ雅樂頭伺公
御囲御茶具御飾所謂
御掛物　圓悟墨蹟　御茶入　大隈肩衝

御花入　青磁碗　御茶碗　明星
御茶杓　利休　御水指　縄すたれ
御釜　筋　御香合　青貝
三羽　大鳥

と記録されているのでこの日の記録と確認できる。

（2）紀州様　紀伊徳川家第二代藩主光貞（中納言の唐名を黄門という）。

（3）蕪なし　「蕪なし」は既に[1]前報告（『茶会集』の評釈（一）―寛永年間の御成の茶会―）にて解説したが、『江戸幕府日記』では「青磁碗」と記録されている。

（4）明星　『江戸幕府日記』によれば、四月十一日の水戸光圀の辞見の折にも用いられている。

〔茶会番号なし〕

（1）西福寺　さいふくじ　西福寺という名の寺院は日本全国に多く存在するが、これがもし尾張の西福寺ということであれば、泰心公（尾張藩第三代藩主徳川綱誠）が鷹狩の際に訪れて、その景観を称賛し、御真筆にて大澤山の山号額を授与したと伝わる「大澤山　西福寺」の可能性がある。

（2）織田貞知「おださだとも」か　織田貞幹「おださだもと」か。

[6]『寛政重修諸家譜』に織田貞知の名は見いだせない。

『寛政重修諸家譜』によれば、織田貞幹は織田信長のひ孫にあたる。信長の九男信貞は長男の信次が病弱であったため、次男貞置に跡目を譲った。そのため貞置は兄信次の子貞幹を自分の跡目とした。貞幹は貞置に養われて尾張大納言光友卿に仕え、後に（国）家老となり、寛永四年十二月二十三日従五位下周防守に叙任された。貞置の養嫡子であった貞幹は、貞置から茶の湯を学んだとされる。『寛政重修諸家譜』には織田貞幹の名はみえるが生没年は記されていない。

『茶道人物事典』によれば養父・貞置の生没年は元和三年（一六一七）～宝永元年（一七〇四）。織田信長の孫。徳川家に仕えて一〇〇〇石を知行した。茶湯は有楽の孫・三五郎長好に学び、のち高島玄端の指導を受けて有楽流の一派の貞置流をはじめた。通称・五郎左衛門。号・永年堂・山花老人・如鳶子・黄雀軒・茅翁・文芳翁を称す。

[7]長谷義隆氏によれば

尾張藩の初代義直は、徳川御三家筆頭にふさわしい大名茶を打ち立てるために、その中心シンボルに織田家ゆかりの茶席を移築し、茶の湯に精通した者数人を抱えた。

その一人が、織田有楽斎のもとで茶の湯の研さんを積んだとされる武野仲定（なかさだ）だ。利休の師匠である大茶人、紹鷗の孫。（中略）武野家は尾張家の初期からゆかりが深かった。

武野家に代わって尾張藩の茶道に登場してくるのが、織田信長の孫である織田貞置。有楽流の茶法を継いだとされる高家旗本。貞置の養嫡子の貞幹の代で織田一族の尾張家への出入りは絶えるが、代わって貞置の高弟の二代松本見休が「尾張徳川家茶道組頭」として登場してくる。

と述べている。

（3）奈良風炉　ならぶろ　元は奈良で作られていた土製の風炉。後には京都でも同じ形式のものが作られるようになり、同じ名前で呼ばれた。

（4）阿ミ陀堂　阿弥陀堂釜　あみだどうがま　長野裕氏（『角川茶道』）によれば「茶の湯釜。操り口、肩は丸みを帯び下がり、胴は

ほぼまっすぐになる。羽落ち丸底で布・砂・たたき膚などで鐶付は鬼面。胴部に銘文花押などを陽鋳したものもある。製作についての逸話が幾つかあるが定説はない。『有馬茶会記』『松屋会記』『宗湛日記』などに記載されているが、多く新釜とみえるところから、安土桃山後期ごろからの好釜として製作されたと考えられる」と解説している。

（5）南京染付　なんきんそめつけ　白磁や白釉の陶器の下絵を付ける技法のひとつ。中国ではイスラムを意味する「回」で産する青という意味の回青と呼び、日本では南京・呉須などと呼んだ酸化コバルトを顔料として白地の上に文様を描き、透明な釉薬かけて焼成することで透明釉下に青藍色の鮮やかな文様を発色させたものである。

（6）織部焼　おりべやき　竹内順一氏（『角川茶道』）によれば「美濃焼の一種。（中略）武将茶人古田織部（天文十三年〈一五四四〉―元和元年〈一六一五〉）にちなむが、「織部焼」の名が文献に登場するのは、『茶器弁玉集』（寛文十二年〈一六七二〉刊）の茶入の名称が初出で、箱書きでも貞淳年間（一六八四―八八）をさかのぼる例はない。したがって古田織部がこの陶器の生産に直接関与した事実はないが、ひずみの著しい沓型茶碗や自由闊達な文様（室町末期から桃山時代に流行した絞り染文様「辻が花」と共通する）が施される鉢や向付などの食器類が、「破格の茶」を目ざした織部好みの道具とみなされた」と解説している。

（7）きうひ　求肥・牛皮　ぎゅうひ　菓子の一種。『飲食辞典』によれば「柔軟性でやや弾力があり、もと牛の皮に似るとて『牛皮』と書かれたが、牛肉食の忌避時代にその文字をはばかって『求肥』に改めたという。シナ伝来の年代はつまびらかでないが、室町時代に茶道興隆の副産として習得されたものと推定され、当時は砂糖の輸入量が少なく、それも多くは黒糖で、精糖は乏しかったから、従って製品の色も感触も牛の皮に似ているとての呼称であろう。『求肥』と書改められたのはおそらく江戸初期で、それ以前は公家の日記などにも単に『うし』とのみ記されている。江戸に伝わったのは寛永以降で『江戸砂子』の著者菊岡沾涼の『本朝世事談綺』（享保一八〈一七三三〉年版）に、寛永中幕府の使節が上洛して試食賞美し、帰って江戸の菓子司に求めても得られなかったので、京から中島浄雲なるものを召下してつくらせたのがはじめだとあり、神田鍛冶町の丸屋播磨はその後裔といわれる」と解説している。

（8）宗旦の哥　「茶の湯をば・・・」この歌は『利休百首』の中で読まれている歌として知られているが、[8]飯塚修氏によれば、

『利休百首』は、また『紹鴎百首』の称で世上に伝えられていたようである。（中略）『利休百首』あるいは『紹鴎百首』といっても、利休なり紹鴎なりが自ら集めて一巻としたものではない。後世の人士が、利休あるいは紹鴎の道歌として伝えられていたものを集めて一巻の書としたものである。

と説明している。[9]趙亜男氏によれば東京芸術大学付属図書館蔵の『利久居士茶道百首』（一七七三年）と『紹鴎百首』佐賀本（一八一八～一八九八年）にはこの歌を含む八首が収録されていないことを指摘しているが、[8]飯塚氏によれば千宗室（淡々斎）は、

もともと、百首という験の良い数をまづ設定し、そこに茶道人の教養として必須とする茶道精神や作法を説こうというのが編集者の企画であった。それゆえ、利休の道歌すべてをもらすというものでもないし、編集者が自己の茶道観を以て取捨選択したということになる。また編集当時の時代色が加味されたといわねばなるまい。これらのことは、必然的に追加や補正を

促した。とくに啓蒙的なものだから、読者も容易に補正を加えることができた。そして、それぞれが流布したのであるから、若干の異同が見られることもある。

と説明している。『茶会集』ではこの歌を宗旦の歌としているが、詳細は不明である。

〔茶会14〕

（1）池嶋立佐　いけじまりゅうさ　池嶋立佐についての詳細は不明であるが、有馬記念館では、現在は篠山神社所蔵である有馬家伝来の褐釉四耳壺（呂宋壺）「小烏茶壺」を展示する際、「宝永二年（一七〇五）に幕府御用の根付挽物師の池嶋立佐と茶器塗師の藤重藤言が名物（千利休時代の名器）と鑑定した」と説明している。

（2）三畳臺　三畳台目席　さんじょうだいめのせき

台目構え　だいめがまえ　浜本宗俊氏（『角川茶道』）は「台目畳で出炉になり、中柱が立ち、中柱の軸壁の隅に釣棚を設ける構え。（中略）台目というのは畳の四分の一、すなわち台子の寸法だけ切った畳をいう。初めは大目とも書かれた時代もある。（中略）三畳に台目畳が一畳入ると三畳台目といい、四畳半に一枚台目畳が入れば四畳半台目という」と解説している。

（3）磯田助左エ門　いそだすけざえもん[10]　池田和臣氏は「国文学古筆切等資料」のなかで磯田助左衛門が正徳四年（一七一四）に「京極黄門定家卿御筆御自詠七拾首之巻物一軸」を代金六百八拾両で山野辺主水正門より購入し、更に元文四年（一七三九）に金三百枚で神田茂左衛門へ売却した手形を翻刻している。その折、池田氏は「神田とは古筆鑑定を業とした神田家と関りがあるのであろうか」と推測している。また、細川家には三代藩主細川網利が磯田助左衛門に宛てた手紙も二通残っている。磯田助左衛門は熊本藩主細川網利から直接書状をもらう程の名の通った道具商だったと考えられる。磯田常数は助左衛門よりも先に名前が書かれており、正客と考えられるが、助左衛門に関りのある目上の人ということになる。

（4）初座　しょざ　浜本宗俊氏（『角川茶道』）によれば、初座とは中立ちのある茶事の最初の席をいう。後座の陽に対して陰である。その席中の飾り付けを初座荘（かざり）という。陰なれば窓には簾を掛け、床には普通は掛物を掛ける。茶事の内容・趣向によって異なる。一、二例を挙げると、祝事の釜なれば掛物の前に熨斗荘（のしかざり）をするとか、茶入・茶杓・茶碗などを床の上に飾って、後座の濃茶の意図をあらかじめ表示することもあり、また趣向として夜咄（よばなし）の茶事の催しでは時間帯によって、初座に花を入中釘に掛け、後座に掛物を掛けることもあり得る。台子・棚を用いる時は初座からこれを据え、棚によって、水指・薄茶器のほか、羽箒（はぼうき）・香合を飾ることもある。なお初座の陰というのは、席中の明かり謂（い）いではなく、主体は釜のにえ音をさしていう。

（5）実傳　実伝宗真　じつでんそうしん　永享6年（一四三四）―永正4年（一五〇七）芳賀幸四郎氏（『角川茶道』）によれば、実伝は室町中期の臨済宗大徳寺派の僧。美濃恵那郡の人。幼少で両親を失い四歳で大円寺に入り、一四歳から建仁寺の天潤庵で修業したが、二十九歳の時から大蔭庵の春浦宗熙（しゅんぽそうき）に参じてその法を嗣いだ。文明十八年（一四八六）に大徳寺の住持となり、退院ののちは養徳院に住し、後土御門天皇から仏宗大弘禅師号を賜った。また、実伝は絵をたしなみ、十牛図などを好んで描いた。

（6）おとこせ　乙御前釜　おとごぜがま　長野裕氏（『角川茶道』）によれば、「姥口（うばぐち）で肩が高く丸く張った茶湯釜。鐶付鬼面。天正三年（一五七五）十月の信長茶会に『炉ニヲトコセノ釜釣テ』とあり、更に天正二十年十一月『山里ノ座敷ひらきに』使用している。これは信長から秀吉に伝来した名物釜」と説明しているが、一般的

には茶湯釜の一種で姥口と布団釜の中間でお多福の面のようにふくよかな形の釜をいう。名物に天明作などがある。

（7）松平伯州　まつだいらはくしゅう　松平伯耆守氏信か。伯州とは伯耆守のことを指すが、江戸時代に松平姓の伯耆守は五名いる。松平信久・氏信・定秀・近明・庸倫である。その内、元禄十三年に生まれていないか、まだ伯耆守になっていない三名を除くと信久（寛永六年〈一六二九〉―承応元年〈一六五二〉）か氏信（慶長十八年〈一六一三〉―天和三年〈一六八三〉）ということになるが、より元禄十三年に近い時代を生きた人物とすれば氏信ということになる。しかし、この記録が後年に写しまとめられたものと考えると享保十二年（一七二七）に伯耆守となった松平庸倫とも考えられる。

（8）後座　ござ　浜本宗俊氏（『角川茶道』）によれば、後座とは客中立ちした後、軸を巻き上げ、向釘に花を入れ、道具畳に水指・茶入を飾り付けて客を迎え入れ濃茶を点て、後炭を直し薄茶を点てて一会を終わる。後座は陽なれば、外つりの簾も外しおく。客からいえば「後入り」、主側からは、中立ち前は「初座」であり、中立ち後は後座という。

（9）掃部殿　井伊掃部頭のことであるが、元禄十三年正月十七日の時点での井伊掃部頭は大老井伊直興（なおき）である。

（10）楼梅　ろうばい　マンサクの花のことか。金楼梅であればマンサクである。「マンサク」は他の花木に先駆けて「まず咲く」ことを語源とする。シナマンサクは中国産のマンサクであるが、他のマンサクよりもさらに一月ほども早く咲く。開花は所にもよるが福岡市植物園では十二月から一月という。楼梅が蝋梅を指すのであれば、雪中四友と呼ばれ、雪の中で咲くという四つの花のうちの一つで、別名唐梅と呼ばれる花。開花期は一二月から二月である。

（11）古唐津　こからつ　河原正彦氏（『角川茶道』）によれば、古唐津は唐津を中心とする肥前一帯で焼成された唐津焼の作品のうち、室町末期から桃山・江戸初期とみられる作品を、俗に古唐津と呼んでいる。

（12）熊川　こもがい　赤沼多佳氏（『角川茶道』）によれば、こもがいは高麗茶碗の一種。慶尚南道の熊川港を経てもたらされたためにこの名があるといわれ、おそらく熊川よりやや奥まった地域の窯で焼かれたものと考えられている。口端が外反りし、胴に丸みのある独特の姿で、深い見込中央に鏡とよばれる円形の茶溜りがあるものが多く、鏡の小さいものが特に喜ばれる。高台は大ぶりで、多くは土見せである。胎土は鉄分の多いねっとりとしたものと、鉄分が少なく白みをおびたものとがあり、釉色は朽葉色を主として、青みを帯びたものもある。熊川は作ゆきの違いによって真熊川・鬼熊川・紫熊川・ヌメリ熊川などと分けられているが、かつては熊川の中の古作のものを咸鏡道の産と考え、「カガンドのて」と称したこともある。

（13）ろてい　驢蹄　小田栄一氏（『角川茶道』）によれば、驢蹄とは唐物茶入の形状の一。驢蹄口ともいい、口がラッパ状に開いていて、驢馬の蹄の形に似ているからその名がある。『茶器弁玉集』に「驢蹄口と云ふことは、驢蹄と書き、うさぎうまのひづめと読めり、口造り馬の爪蹄（そうてい）に似たる故にいへり」とある。名物としては「成瀬」「紅屋」「宗半」「中屋」「道純」などが知られている。

（14）ま由者こ　まゆばこ　蚕の繭のように、真ん中あたりが少し細くなった筒のことか。

（15）細川三斎　ほそかわさんさい　細川忠興のこと。永禄六年（一五六三）―正保二年（一六四五）。村井益男氏（『国史大辞典』）によれば、細川忠興は安土桃山・江戸時代前期の武将、茶人。山城国勝竜寺城主細川藤孝の長子として、永禄六年（一五六三）十一月十三日京都に生まれた。母は沼田光兼の女麝香（のちの光寿院）。

幼名は熊千代。生後間もなく、将軍足利義輝の命により細川輝経の養子となり、その家名を継いだが、実際には父母の手許で養育された。（中略）天正五年（一五七七）二月、織田信長が雑賀一揆を攻撃したとき、父藤孝とともに従軍して和泉国貝塚合戦で初陣、続いて松永久秀攻撃にも参加、（中略）以後摂津・播磨・丹波・丹後方面に父とともに転戦、同八年七月信長から丹後十二万石余を与えられ、八月入国、はじめ八幡山城に居し、のち宮津城を築いてこれに移った。またこの間同六年八月には明智光秀の女玉（のちのガラシャ・秀林院）を妻に迎えた。同十年の本能寺の変では、信長を倒したあと光秀は細川父子の協力に大きな期待を寄せていた。しかし彼らは直ちに髻を払って信長に対する弔意を表わし、また忠興は妻を丹後国味土野（京都府竹野郡弥栄町）の山中に蟄居させるなどして光秀に与せず、反光秀の行動を示した。事変後政局の主導権を握った羽柴秀吉は、このような細川父子に対し「別して入魂」の旨の誓紙を送るとともに、忠興には丹後国一円知行を安堵する書状を送り（天正十年七月十一日）報いた。本能寺の変を契機に藤孝は剃髪、隠居して幽斎玄旨と号し、忠興が当主となった。秀吉政権下に入った忠興は、その後小牧・長久手の戦、九州平定、関東平定など秀吉の天下統一に協力、これに伴って官職も進み天正十三年七月十一日従四位下侍従、十六年には左近衛少将に任じられた。また秀吉の朝鮮出兵にあたっては文禄の役に出陣、主として慶尚道方面で行動したが、晋州城攻撃では多大の損害も出した。講和交渉のため文禄二年（一五九三）閏九月に帰国、慶長元年（一五九六）九月の秀吉と明使の接見には忠興は奏者役を勤め、このとき従三位参議に昇任、越中守に任じられた。豊臣秀吉の没後は武将派の一人として石田三成と対立、慶長四年十一月には徳川家康・秀忠に別心ない旨の誓紙を出して家康勢力側に投じ三男光（のちの忠利）を証人として江戸に送った。家康はこれに対し五年二月、大坂の台所料との名目で豊後国杵築六万石を加増した。同年九月関ヶ原の戦がおきると家康軍に属して行動し、美濃国岐阜城を攻略、九月十五日の合戦では忠興軍は首級百三十六を挙げ、その後父幽斎の丹後田辺城を救援、さらに丹波福知山城の小野木公郷を降すなどしたが、大坂屋敷に残留していた妻のガラシャ夫人を失うなどの犠牲も払った。戦後の論功行賞では豊前一国と豊後国国東郡および同国速見郡の旧領計三十九万九千石が与えられ、慶長五年十二月新領国に移り豊前中津城に入城、翌六年には新領の検地、知行割を行い、七年には関門海峡を抑える小倉の地に新城を築きこれに移るなど領国体制を整備した。大坂の陣を経て元和四（一六一八）、五年ごろから病気がちになり、隠居を幕府に願い、同六年閏十二月許可されて嗣子忠利に家督を譲り、剃髪して三斎宗立と号し、中津城を隠居城としてこれに移り、寛永九年（一六三二）十月加藤忠広改易のあとをうけて忠利が肥後熊本に国替えになると、八代城を隠居城として同年十二月ここに移った。寛永十八年三月忠利は父に先立って死んだが忠興は長寿を保ち、正保二年（一六四五）十二月二日八十三歳の高齢をもって八代に没した。法号は松向寺三斎宗立大居士。（中略）しかし一面では、その家柄もあって当時屈指の文化的教養の持主でもあった。武家故実に通じていたほか鷹狩・能・和歌・連歌などを好んだが、特に茶湯においては千利休の高弟で利休七哲の一人に数えられている。天正十五年の北野の大茶会では自身の茶屋を影向（ようごう）の松の根かたに構え、これを松向庵と名付けたので、これが法号の松向寺殿のもととなった。忠興の茶湯の系統を三斎流とよび、その門弟一尾伊織がおこした一尾流もその一流である。以上のような忠興の多面的な行動、特に慶長五年以後については約二千通にものぼる彼の書状がその面目を伝えている。

(16) 玉澗　ぎょくかん　古原宏伸氏（『角川茶道』）によれば、玉澗は宗末元初の詩画僧。中国では佚名（いつめい）の画家。ほぼ同時期に玉澗の別

号をもつ画僧には、瑩玉澗・孟玉澗・彬玉澗・芬玉澗の四人が記録されている。日本で珍重され、また「瀟湘八景図巻」「廬山図」の筆者としては、芬玉澗が同定されている。法名は若芬、字は仲石、号は玉澗、浙江の婺州金華の出で、俗姓は曹氏。天台宗に入り、杭州天竺寺の書記を経て各地を遊歴した。晩年故郷に帰って詩画三昧の風流を楽しみ、八十歳で示寂した。諸国の自然景観を粗放な筆墨で即興的に映し出した山水画には、多くの自作の詩を題したといい、上述の名品二点（重文）にも巧みな詩が書せられている。

(17) 芦屋　芦屋釜　あしやがま　長野裕氏（『角川茶道』）によれば、芦屋釜は茶湯釜の一。筑前国芦屋津（現、福岡県遠賀郡芦屋町）にて作られた釜のこと。芦屋は天命とならび代表的鋳造地として古くから知られた所である。（中略）芦屋の鋳造史を考える時、文献・遺品が少なくないにもかかわらず、明確なことはなにも分かっていないのが現実である。（中略）芦屋釜の形姿は繰り口・丸肩・鍔羽・丸底に煙返しのある真形であり、鐶付は多く鬼面である。文様は松竹梅・桜・花・馬・山水・霰などが多く無地紋釜は少ない。（中略）芦屋は安土桃山時代以後、その勢力は急速に衰えている。（中略）芦屋釜は幾つかの例外を除いて真形に文様というパターンを長年続けてきたところであり、好釜の多様化した世界に応じられなかったと思われる。

(18) 極　きわめ　小田栄一氏（『角川茶道』）によれば、道具を鑑定することを極めるといい、これを証明するものを極という。極は料紙を用いる場合と、箱に記される場合とがある。また書画では直接紙中に記入されることもあり、これを紙中極という。極を記した料紙を極札といい、添え包・箱貼・外題などの体裁で道具に付属する。書画では古筆家をはじめ鑑定を専門とする家が生まれ、手軽いほうから順に、正筆書・極札・折紙の三段階の鑑定書を発行した。茶器では同系流の人の極が多く、茶家の歴代宗匠の箱書も一種の極の役を果たしている。

(19) いたたい　板鯛　板付きの鯛のかまぼこの事か。[11]『飲食事典』によれば、かまぼこの発生は室町中期といわれる。当初の製法は今のチクワで、魚のすり肉を細竹に塗り付け炭火に炙って焼成した形が、水辺に生ずる蒲の穂に似ているからという呼称と称せられている。『運歩色葉集』（一五四八）にも「蒲穂子」とあるなどから見て、最初のカマボコが現在の焼チクワであったことがわかる。『摂戦実録大全』（一七五二）に豊臣秀頼が伏見から大阪城に帰った時、板付カマボコをつくらせたとの記事があるのを事実とすると、遅くも桃山時代には行われていたと見る。板付カマボコは『大草殿より相伝之聞書』（一六八二）にはその製法が記されている。手法は板に塗りつけて炙って作る焼きカマボコである。重引きは焼き物である。

(20) こまほうろ　ごまぼうろ　ボーロ。洋菓子の一。[12]『飲食事典』によれば、ボーロ等の菓子がわが国に伝わったのはポルトガル人からで、全国的に有名なのは京都の蕎麦ぼうろだが、同じ三条に河道屋と河みち屋と同音の両店が併立して「ボール」と「ボーロ」との二様にわかれている。『和漢三才図会』や『長崎夜話草』には「保宇留」（ボウル）とあってこの方が古い呼称であったらしく、江戸に移ったのは一八世紀の天明以降で「丸ぼうる」「胡麻ぼうる」「花ぼうる」などいろいろあるが、西国方面には早くから行われて佐賀の丸芳露は直接ポルトガル人から伝授されたと称し、讃岐（香川県）豊浜の丸ぼうろは一七世紀の慶長年間長崎のオランダ人直伝といっている。

謝辞

本研究を行うにあたり、資料収集にご協力頂きました名古屋市蓬左文庫の皆様に、また翻刻を行うにあたりご指導を頂きました社会専

修・中村修也先生に深謝いたします。

参考文献

1. 石井智恵美「『茶会集』の評釈（一）―寛永年間の御成の茶会―」『文教大学教育学部紀要』第五二集　三〇六～三二〇頁、二〇一八年
2. 石井智恵美「『茶会集』の評釈（二）―正保元年の山里茶会―」『文教大学教育学部紀要』第五三集　二七六～二九八頁、二〇一九年
3. 石井智恵美「『茶会集』の評釈（三）―寛文年間の柳営茶会―」『文教大学教育学部紀要』第五四集　二九〇～三〇八頁、二〇二〇年
4. 石井智恵美「徳川家光・家綱将軍期の茶道具の献上と下賜」『茶の湯文化研究』第二号　一～二二頁、二〇二二年
5. 武田庸二郎「徳川家綱の茶の湯について―身分制社会における饗応と贈答―」（村上直編『幕藩制社会の地域的展開』雄山閣出版、一九九六年、四九三～五二八頁）
6. 『寛政重修諸家譜』第八（続群書類従完成会　一九六五年、一八二～一八三頁）
7. 長谷義隆「『茶どころ探訪』余話―尾張藩ゆかりの有楽流をめぐって」『茶の湯文化学会会報』四一号　六～七頁、二〇〇四年
8. 飯塚修「利休道歌の系統と展開―百首歌を中心に―」『言語研究』文篇　五二号　一五〇～一七〇頁、二〇〇七年
9. 趙亜男「東京芸術大学附属図書館『利休居士茶道百首』攷―附釈文―」『日本アジア研究』第一四号　一三七～一六一頁、二〇一七年
10. 池田和臣「国文学古筆切等資料」『茨城大学人文学部紀要、人文学科論集』二一号　八三～一〇八頁、一九八八年
11. 本山荻舟『飲食事典』（平凡社、一九五八年、一一七頁）
12. 前掲載文献11（五五六～五五七頁）